Ⅰ「天満」地区　…「大阪天満宮」を中心にして

1.「大阪天満宮」周辺

(1)「大阪天満宮」について　　北区天神橋2丁目1

・菅原道真公(天神さん)を主祭神とする「天満宮」で、大阪市民からは”天満の天神さん”と呼ばれて親しまれており、毎年7月25日を本宮とする「天神祭」は日本三大祭、大阪三大夏祭りの一つとして知られている。

・奈良時代の白雉元年(650)、孝徳天皇が難波長柄豊崎宮を造営した際、都の西北を守る神として創建された「大将軍社」が始まりとされ、延喜元年(901)に菅原道真が藤原時平によって九州大宰府へ配転(左遷)させられた際、この地の「大将軍社」に参詣され、旅の安全を祈願された。

・延喜3年(903)に菅原道真が没した後に天神信仰が広まる中、天暦3年(949)に道真ゆかりの大将軍社の前に7本の松が生え、霊光を放ったという奇譚(ｷﾀﾝ)が都に伝わった。それを聞いた村上天皇の勅命によってこの地に「天満宮」が建立され、以後、大将軍社が摂社となり、天満宮が中心となった。現在、大将軍社は天満宮・本殿の西北部に祀られている。

・その後、享保9年(1724)の ”享保の大火(妙知焼け)” や天保8年(1837)の ”大塩平八郎の乱” で全焼したが、天保14年(1843)には現在の本殿が再建されており、昭和20年の大阪大空襲では、幸いにも難を免れた。

・境内には三つの「狛牛」が祀られている。これは菅原道真が ”丑年丑月丑日丑刻” の生まれであることに拠っており、天満宮の神使は「牛」とされている。

「表大門」

・天満宮の正門で、天井に方位盤が吊るされており、方角が干支で示されているが、「酉」の方位に鶏でなく「鳳凰」が描かれている。

・菅原道真が、道明寺の伯母との別れを惜しんで ”鳴けばこそ 別れをいそげ 鶏の音の聞こえぬ里の 暁もがな” と詠んだとの故事によって、天満宮では鶏が嫌われており、絵馬にも鳳凰が描かれ、お供に鶏はもちろん鶏卵も避けられている。これは、菅原道真が雷神とされており、中国の故事で、”雷神は鶏が恐ろしい” とされていることにも結び付いている。

・傍らに、「西山宗因向栄庵跡」の碑が建っている。

「西登龍門」と「東登龍門」

・本殿の両側にある唐門で、年に一度(初天神の日)だけ通ることが許されており、鯉が滝を登って竜になる中国の故事から立身出世の関門として祀られている。
門前の両側に、龍の図柄の金燈篭が復元されている。(道真公千百年大祭記念)

「蛭子遷殿」

・大将軍社の西側にあり、蛭子(ｴﾋﾞｽ)大神を祭神としている。

・永らく途絶えていた「十日えびす」祭事が、平成18年の「天満天神繁昌亭」(後記)開館を記念し、「天満天神えびす祭」として復活し、公募で女子大学生から選ばれた福娘による福笹吉兆の授与や北新地えびす詣招福行列が催行されている。

「蛭子門」

・天満宮の南西門で、かってはこの門の先に蛭子遷殿が祀られていたことに因む。

「梅花殿」

・昭和3年の ”1025年大祭” 記念に建造された寝殿造りの賓殿で、伊勢神宮の古材を拝領しており、「神楽殿」・「参集殿」とともに国の登録有形文化財に指定されている。

「白米社」

・稲荷大神を祭神としており、伏見稲荷大社の奥院とされている。

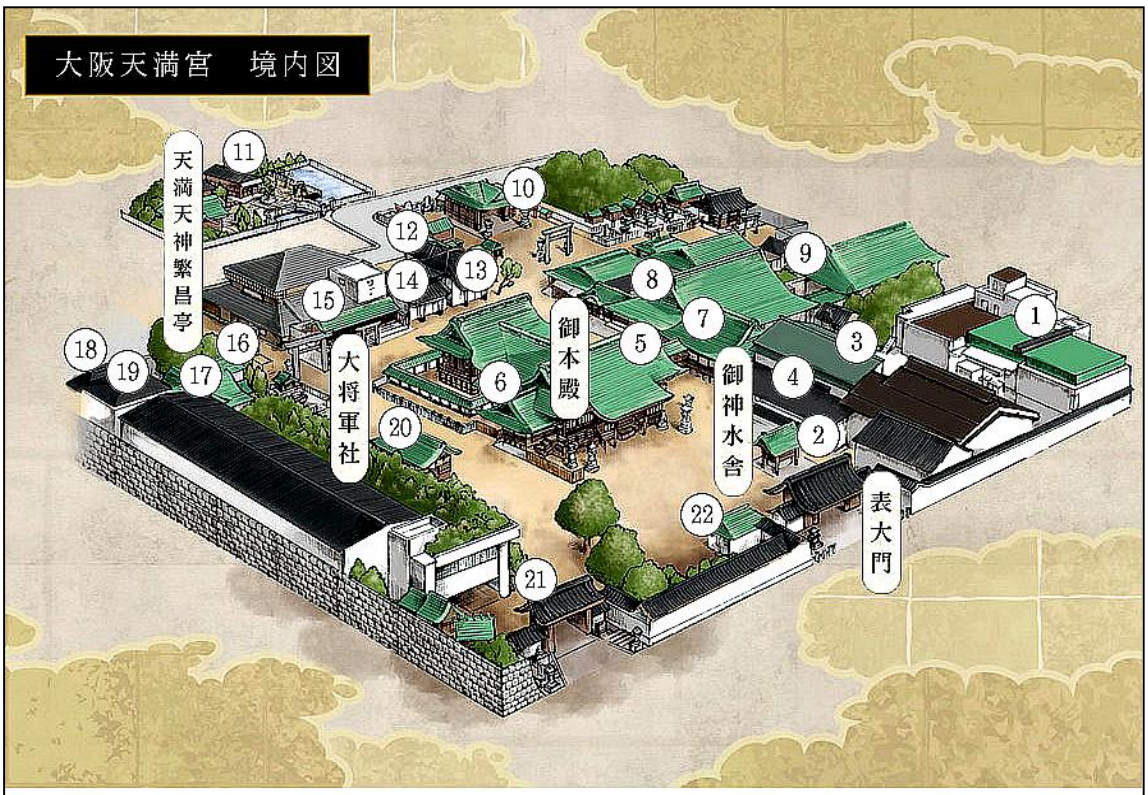
「鳳輦（ホウレン）庫」
・鳳凰の飾りがある神輿の収蔵庫で、明治5年に廃社となった「川崎東照宮」神輿庫が昭和15年に移築された。 屋根瓦には葵の御紋がある。

「星合池」
・”亀ノ池”とも称され、七夕神事の旧跡で、7月7日には「星愛七夕まつり」が開かれる。

「老松神社」 … 蛭子門の東横
・住吉大神、神功皇后を祀っており、貞観2年（860）に旧北区老松町3丁目(現・西天満4丁目付近)に建立されていたが、平成2年に当社に遷宮された。

「神武天皇聖蹟難波之碕顕彰碑」 … 老松神社の東横
・『日本書紀』にある ”神武東征の際、上陸した難波之碕”がこの辺り(上町台地の先端)だとされ、紀元2600年(昭和15年)を記念して建立された。

「大阪ガラス発祥之地」碑 … 西門横
・長崎でガラスの製法を学んだ播磨屋清兵衛が、宝暦年間（1751年頃）この地でガラスの製造を始め、数十年前までは天満周辺に多くのガラス工場があった。



「天神祭」
・京都の祇園祭、東京の神田祭とともに「日本三大祭」の一つで、生國魂神社の生玉夏祭、住吉大社の住吉祭と共に「大阪三大夏祭り」の一つでもある。
メインは、7月24日の宵宮（宵宮祭・鉾流神事・催太鼓・獅子舞氏地巡行）、25日の本宮（本宮祭・神霊移御・陸渡御・船渡御・奉納花火)であるが、6月下旬吉日～7月25日の約1か月間にわたり諸行事が行われる。
・天神祭は、天満宮御鎮座の翌々年、天暦5年（951）に社頭の浜から神鉾を流し、流れついた浜に斎場を設けて「禊祓い（ミソギハライ）」を行ったが、その折、神領民が船を仕立てて奉迎したのが、その始まりとされ一千年超の歴史を誇っている。
天下の台所と呼ばれた元禄時代（17世紀後半）以降、天神祭は浪速の繁栄のシンボル

として隆盛をきわめ、享保年間（18世紀前半）には「講」という祭りを支える組織が誕生し、新たにお迎え人形も登場して、祭りの豪華さは全国にその名が知られるようになった。
・祭りは、6月下旬吉日の ”装束賜式” から諸行事が始まるが、7月24日の7時45分より本殿にて宵宮祭が斎行され、夏越祓いの神事のあと、8時50分頃に斎船で堂島川の中ほど(「鉾流橋」付近）に漕ぎ出して船上から神童が神鉾を流し、御神意を伺うとともに氏子市民の無病息災と市中平穏を祈願する ”鉾流神事” でスタートする。
かっては、この神鉾が流れ着いた堂島川の下流の地がその年の行宮（お旅び所）とされ、そこまで、本宮の船渡御が斎行されていたが、地盤沈下の影響で橋桁が低下して下航することが困難となったため、昭和28年（1953）からは大川を遡航する（上流の桜宮方向に向う）という現在の形に変更された。（船渡御は、幕末の政変や二度の世界大戦で中断されていたが、昭和24年に復活された。）
・令和2年の祭りは、新型コロナウイルス感染症の拡大を背景に、花火を含めて中止され、7月25日に、悪疫退散を祈願する神事が神職のみで執り行われ、ライブで動画配信された。（祭りの中止は、昭和49年にオイルショックの影響で中止されて以来、46年振り。）

「本宮」と「陸渡御」

・7月25日の本宮では、午後1時半に御霊を御鳳輦（ｺﾞﾎｳﾚﾝ）に移す ”神霊移御祭” が催され、午後3時半から船渡御の乗船場（「天神橋」の袂）までの約4kmを神輿渡御に随伴して3千人が巡行する ”陸渡御（ﾘｸﾄｷﾞｮ）” が始まる。 行列は、先頭が催し太鼓で、続いて花傘、猩々（ｼｮｳｼﾞｮｳ）の人形を乗せた山車、牛曳童児などの第一陣、御羽車や神霊を移した御鳳輦のある第二陣、玉神輿と鳳神輿の第三陣によって構成される。
・天満宮境内では、独特の調子を奏でるお囃子（ﾊﾔｼ）が鳴り響き、踊りで盛り上がる。

「船渡御」

・午後6時から ”船渡御” が始まる。 船は、御神霊をのせた ”御鳳輦奉安船”、催太鼓船や地車囃子船など神に仕える講社の ”供奉船”、神をお迎えする人形を飾った ”御迎船”、協賛団体や市民船などの ”奉拝船” の4種類に分けられ、このうち”奉安船”と”供奉船”が天神橋の袂から出航して大川を遡り、反転して下る。 その他、どんどこ船や落語船等自由に航行できる列外船があって、祭を盛り上げており、船同士が行き交う時には”大阪締め”が交換されるが、”御鳳輦奉安船”が通過するときは沈黙するのが習わしとされる。
・渡御の渡中、御鳳輦船では水上祭が斎行され、停船している舞台船や供奉船から神楽や囃子が奉納される。この頃から奉納花火が打ち上げられ、祭は最大の盛り上がりを迎える。（花火は川崎公園と桜ノ宮公園北端の2箇所から約5千発打上げられるが、川崎公園の花火は、平成14年より「水都祭」の花火の一環にもなっている。）
・なお、大川を渡る御神霊を乗せた御鳳輦奉安船を見下ろすことがないよう、天満橋・桜宮橋・源八橋にはこの日、その橋の真ん中に”正中の覆い”（板）が取付けられる。
・現在も、西区江之子島の木津川東畔には「天満宮行宮」があり、近くには「天満宮神幸御上陸地」碑が残されている。 かっての一時期、この地が行宮（御旅所）に定められ、船渡御がここまで来て、陸渡御で天満宮に帰っていた頃の名残である。

(2)「天満天神繁昌亭」　北区天神橋2丁目1

・上方落語の定席として平成18年9月に開館。 昭和32年（1957）に「戎橋松竹」が閉館して以来、半世紀ぶりに大阪に寄席が復活した。
上方落語協会会長の桂三枝（後の6代・桂文枝）が、天神橋筋商店街と大阪天満宮に協力を呼びかけ、天満宮から神社北側の駐車場であった場所の提供を受け、実現した。
・地上鉄筋3階建てで、座席は1・2階に216席が配置され、劇場内外の天井には募金をした人々の名前や団体約4,500件分の名前の書かれた提灯が吊るされている。。
・上方落語隆盛の時代の象徴として語り継がれる「赤い人力車」が復元され、飾られている。 初代・桂春團治が多忙のために移動の手段として使用したとされるものを復元したもので、多額の借金による「火の車」であるとの洒落にもなっている。
繁昌亭こけら落としの記念として、3代目桂春団治がこの人力車に乗り、三枝が車引きに

扮して天神橋筋商店街をパレードした。
・正面入口横に建つ石碑（「天満天神繁昌亭」）には、「上方落語の始まりは1700年頃、京都に露の五郎兵衛、大阪に米沢彦八が現れ、神社の境内などでおもしろい噺を聞かせてみせた。これらは「辻ばなし」とも言われ、これが出発点とされる。一時はすたれるが、1800年頃、大阪・坐摩神社で桂文治が小屋掛けの常打の寄席を始め、以来各地で落語専門の常打の小屋が出来る。1900年頃、上方落語は隆盛を誇るも、第二次世界大戦で大阪は焦土と化し、全ての落語の定席を失う。2006年9月15日、多くの上方落語を愛する篤志の皆様の浄財で、大阪天満宮、天神橋筋商店街のご協力により、1957年、上方落語協会結成以来、積年の夢であった定席が、明治から昭和にかけて天満八軒と呼ばれた、上方落語の縁の深いここに建立され、上方落語の定席が61年ぶりに復活した。
4500を超える方々のご厚志に応えるべくさらなる上方落語の隆盛を誓う。 社団法人 上方落語協会 」と記されている。

（3）もと「相生楼」と「川端康成生誕之地」碑　　北区天神橋1丁目16

・江戸時代末に創業した老舗料理店で、大阪夏の風物である鱧料理で知られた。
天満宮で挙式した結婚披露宴の場としても有名であったが、平成28年11月末に閉店し、跡地には、平成30年7月築の14階建てマンション「ポンテシエロ」が建っている。
・相生楼の玄関横に「川端康成生誕之地」碑が建っていたが、現在は新しく建てられたマンションの玄関脇に残されている。
その碑には、「『伊豆の踊り子』、『雪国』などの名作で日本的抒情文学の代表作家とされる川端康成は、短編小説の名手として国際的に知られ、昭和43年（1968）に日本人では初めてノーベル賞を授与されました。彼は明治32年（1899）6月14日の生まれで、生家は料亭「相生楼」敷地の南端あたりにありました。」と記されている。
・医者であった父・栄吉が明治31年に相生楼の南側に引越してきて医院を開き、その翌年に康成が生まれたが、2才の時に父を、3才の時に母を亡くした康成は、茨木市に住む祖父母に引取られているため、この地には3年ばかり居たことになる。

（4）JR「大阪天満宮駅」とメトロ「南森町駅」　　北区東天満2丁目10

・昭和42年（1967）3月に大阪メトロ・谷町線が東梅田～谷町4丁目まで開通し、同時に「南森町駅」が設置された。その2年後の昭和44年12月に堺筋線が開業し、平成9年3月にはJR東西線が開業して「大阪天満宮駅」が併設され、それぞれの乗換駅となった。
・メトロ「南森町駅」のホームは、地下1・3階の2層構造になっており、上層がメトロ堺筋線の南北ホーム（2面2線の相対式ホーム）、下層がメトロ谷町線の東西ホーム（2面2線の単式ホーム）となっている。 JR「大阪天満宮駅」は、谷町線「南森町駅」の東側に隣接して設置され、ホーム（1面2線の島式ホーム）は東西方向にあって、西改札口が谷町線の「南森町駅」東改札口と連絡通路で結ばれている。

2.「天神橋筋商店街」周辺

（1）「天神橋筋商店街」

・天神橋1丁目から天神橋6丁目北詰まで南北2.6 kmの間に約600の店舗が軒を連ねる ”日本一長いアーケード商店街” である。
・商店街のおこりは、江戸時代初期の承応2年（1653）に、大川沿いに開設された「天満青物市場」にその源がみられる。 その後、この通りが大阪天満宮の表参道として繁栄し、3丁目付近で東西に交差する寺町通りに並ぶ多数の寺院への参拝者でも賑わった。
・かっては「十丁目筋商店街」（現在も地元では”十丁目（ｼﾞｯﾁｮﾒ）”と通称））と呼ばれたが、これは、江戸時代の大川北岸沿いの南北筋が、東から西へ1丁目筋から11丁目下半筋と名付られており、天神橋北詰にあたるこの筋がちょうど ”10丁目筋” であったこと及び天神橋筋の町名が、「天満1丁目」から「天満10丁目」までであったことに由来している。
・商店街は、南から丁目毎に「1丁目商店街」から「6丁目商店街」（但し、4丁目は「4番街

商店街」と「４丁目北商店街」）に分けられ、例えば1丁目商店街は「天一（ﾃﾝｲﾁ）」の愛称で親しまれている。また、それぞれの商店街ごとに商店会がある。
・南北の商店街の間には最寄駅として、大阪メトロ堺筋線（阪急電鉄・北大阪線が乗入）の「南森町駅」（2丁目）、「扇町駅」（4丁目）、「天神橋筋六丁目駅」（6丁目）とJR環状線の「天満駅」（5丁目）がある。
（なお、天神橋筋7・8丁目にも街路灯はあるが、現在は店も少なく商店街とは言えない。）

「天神橋筋１丁目（天一）商店街」
・天神橋北詰から北へ天満宮表門通まで、最も南側の商店街。
*「鴻池屋植田琴三弦店」　北区天神橋1丁目13
・創業120年の琴・三絃製造などの和楽器専門店で、箏曲教室もある。
・琴の調律は「糸締」といい、琴柱（ｺﾄｼﾞ）の位置を変えて行うが、桐の本体に強い力で張られているため繊細な技が要求される。

「天神橋筋２丁目（天二）商店街」
・天満宮表門通から「南森町駅」（国道1号線）の1筋北の通りまでの商店街で、国道1号線と交差するアーケードの出入口には 天神祭の”お迎え人形” が飾られている。
・商店街東側に「大阪天満宮」、「天満天神繁昌亭」がある。
*「寿司常」 … バッテラ発祥の店　北区天神橋2丁目4
・明治24年（1891）、初代が順慶町で創業し、同36年に天神橋に移って1丁目で開店した後、昭和29年（1954）に3代目が2丁目の現在店を開店。昭和63年に3代目が亡くなったためいったん暖簾をおろしていたが、平成28年7月に4代目が再開した。
・”バッテラ発祥の店” として知られる。
　創業者がコノシロの片身を二枚におろし、ふきんで締めて売り出した寿司が始まりとされる。ふきんで締めるのに手間がかかるため、木の舟形の寿司型を造って押し寿司にしたところ、その寿司型を見た客が、ポルトガル語の「bateira（小舟）」から ”バッテーラ” と呼ぶようになり、いつしか「バッテラ」となった。その後、コノシロが手薄となって鯖を使うようになり、寿司型も箱型に変えられた。
　現在、この店では、形を舟形に戻し、呼称も「バッテーラ」として名物にしている。
*「浪華昆布本舗」　北区天神橋2丁目北2
・明治33年（1900）創業の佃煮昆布専門店で、わさび昆布・細切り汐ふき昆布が人気。
*「岩井香舗」　北区天神橋2丁目北2
・享保3年（1718）創業の御香・お線香・ローソク専門店。匂い袋・祝儀袋や和装品も。

「天神橋筋３丁目（天三）商店街」
・国道1号線の1筋北の通りから阪神高速高架下（もと天満堀川跡）までの商店街。
真中あたりを天満寺町通が東西に交差し、商店街西側に「堀川戎神社」がある。
*「本家 國重（ｸﾆｼｹﾞ）刃物店」　北区天神橋3丁目2
・備中の刀鍛冶・水田 國重の子孫で、創業240年超の刃物専門店。 江戸時代には町奉行所与力・同心のご用達で、大塩平八郎愛用の脇差に”国重”の銘があるとされる。
*「藤為金網篩（ﾌﾙｲ）製造所」　北区天神橋3丁目2
・明治4年（1871）創業で、板前からのオーダーに応える金網篩の製造・修理専門店。
*「薫々堂（ｸﾝｸﾝﾄﾞｳ）」　北区天神橋3丁目2
・元治元年（1864）に大阪天満宮門前にて創業の老舗菓子匠。 かつて天満宮門前に店を構えていた縁で、店先には梅の紋入りの立派な瓦が飾られている.。
昔の店には、「むろの梅羊羹処」の看板を掲げていたが、現在は、”苺大福” や ”桃大福” などの季節限定菓子を名物にしている。

手焼きの玉子せんべいは、約120年変わらぬ味の銘菓。

「天神橋筋4番街商店街」

・阪神高速高架下（夫婦橋）からJR「天満駅」までの商店街で、天神橋筋商店街のほぼ中央に位置する。

・商店街西側に、北区役所、関西テレビ・キッズプラザ大阪、扇町公園、扇町駅がある。

「夫婦（ﾒｵﾄ）橋」

・天満堀川の夫婦池にかけられていた橋。 この橋を渡って天満宮にお参りすると末永い幸せが授かると言い伝えられていた。

高速道路の下に、夫婦橋の橋柱灯や欄干の一部が復元され史跡がある。

*「大清堂（ﾀﾞｲｼﾝﾄﾞｳ）」　北区天神橋4丁目6

・明治20年（1887）創業で4代続く老舗の「おこし屋」。「岩おこし」の包装紙に、木の橋の頃の「夫婦橋」が描かれている。

天満堀川が埋め立てられたときに、夫婦橋の橋名柱を引き取り、店内で保存している。

*スーパー「ニチイ」第1号店

・昭和38年（1963）11月に、天神橋筋商店街の衣料品店「セルフハトヤ」と千林商店街の衣料品店「赤のれん」を中核にして「ニチイ」（社名は ”日本衣料” の略）が設立され、第1号店として「ニチイ・天神橋筋店」が誕生した。

その後、マイカルと社名変更したが、会社更生法の適用を受け、イオンGに吸収された。

「天神橋筋4丁目（天四）北商店街」

・JR「天満駅」から「ぶらら天満」（もと「天満市場」）南側の通りまでの商店街で、飲食店や飲み屋・バーの店が多い。

「天神橋5丁目（天五）商店街」

・もと「天満市場」南側の通りから大阪メトロ堺筋線・阪急「天神橋6丁目駅」南端の通りまでの商店街で、多種多様な業種の店舗が100店以上並んでいる。

・天五から北の商店街の通りは少し狭くなっている、明治時代以降に新たに開けたもので、江戸時代には田んぼの畦道（ｱｾﾞﾐﾁ）であった名残りとされる。

「天神橋6丁目（天六）商店街」

・大阪メトロ堺筋線「天神橋6丁目駅」南端の通りから都島通（大阪メトロ谷町線「天神橋6丁目駅」）までの商店街で、北東角に「くらしの今昔館」がある。

・昭和32年、天神橋商店街で初めてのアーケードが完成（昭和51年に改修）、雨が降ると他の商店街のお客も雨宿りのため集中することになったため、他の商店街でも、順次、アーケードの設置が進められた。 昭和46年には道路カラー舗装（平成5年に改修）も完成した。

（2）JR「天満駅」とその周辺

（ｲ）JR「天満駅」　北区錦町1

・明治28年（1895）10月、大阪鉄道の玉造駅～梅田駅（現在の大阪駅）間開業時に、京橋駅と共に設置された。

昭和8年（1933）に高架化され、当初のホームは島式2線方式であったが、のちに1番ホームが増設されて単式ホーム2面2線方式になっている。　改札口は西側に1ケ所のみで天神橋筋商店街に直結している。

（ﾛ）「ぶらら天満」と旧「天満卸売市場」　北区池田町3

「天満卸売市場」

・江戸時代に大川沿いに開設された天満青物市場は、昭和6年に新設された大阪中央卸売市場に吸収されたのちも天満分場として残置されていたが、昭和20年の空襲で焼失し、昭和24年（1949）にこの地で「天満卸売市場」として再開された。

当初は卸売を主としていたが、次第に一般人も対象に卸値による安価で庶民的な市場

として親しまれるようになった。

「ぶらら天満」 … 「天満卸売市場」の再開発

・平成17年4月に地上28階・地下1階建て再開発ビルが新設され、地下1階から2階に「ぶらら天満市場」、3階から28階がUR都市機構のマンションとなった。

・1階と地下1階がメインで、もと「天満卸売市場」にあった八百屋・魚屋・肉屋・果物屋・漬物屋等の店が並び、地下1階には業務用スーパー「プロマート」が入っている。

(ハ)「延原倉庫・天満倉庫」　北区錦町4

・昭和26年頃、この付近に大阪拘置所を移設するとの計画に対して商店街が反対したため、調整の結果、昭和30年(1955)に、延原倉庫が所有していた都島区友淵の工場跡地と等価交換することで決着し、大阪拘置所は都島区に移設され、当地には延原倉庫の天満倉庫が建設され、現在に至っている。

「東洋紡績・天満工場」

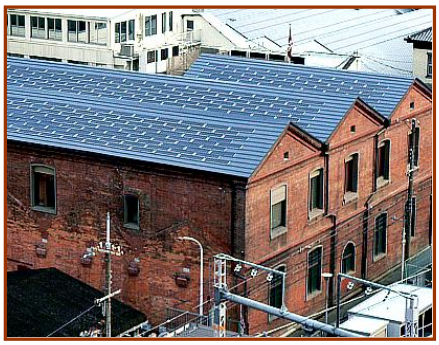
・大阪環状線北側のこの辺り一帯には、東洋紡績・天満工場があり、もともとは天満紡績の工場であった。

・「天満紡績」は、明治20年(1887)3月、この地に設立され、同33年6月に合併で「大阪合同紡績」となったあと、昭和6年(1931)に東洋紡績に吸収合併され、工場は「東洋紡績・天満工場」となった。

・昭和20年の空襲で被災し、規模が縮小され操業していたが、昭和32年に操業は中止され、倉庫として残置されていたが、現在その地はマンション団地「ローレルハイツ北天満」(後記)になっている。「延原倉庫」の地は、縮小された際の工場跡地の一部にあたる。

(ニ)「中西金属工業」　北区天満橋3丁目3

・大正13年(1914)6月、金属おもちゃ製造の「中西製作所」として創業した後、ベアリングメーカーに転換して、昭和16年6月(1941)に「中西軸承金属工業」を設立。昭和20年に現在の「中西金属工業(NKC)」に社名変更した。



・現在、当地には本社と天満工場(少ロット、多品種、高精度製品)、天満治具工場(金型製作)がある。

・この間、昭和13年(1938)に東洋紡績天満工場の一部を買収しており、その時の赤レンガ館(明治19年築)や明治期建物の本社棟が今も現役で使われている。

2階建ての赤レンガ館は、3つの切妻屋根と2階正面の5つのアーチ窓が印象的で、本社棟は、1階が石造風、2階はタイル張りで、屋根が寄棟造桟瓦葺という和風造りになっている。

(ホ)「ローレルハイツ北天満」　北区池田町1

・東洋紡績・天満工場の跡地に、昭和54年(1979)2月に建設された14階建て1・2号棟、全1,342戸のマンション団地。(1号棟＝320戸。2号棟＝東棟、南棟、西棟の1022戸)

(ヘ)「東洋ショー劇場」　北区池田町11

・昭和39年(1964)2月、ビル2階に開館したストリップ劇場(客席数87席)。

・アダルトビデオ女優経験者や現役アダルトビデオ女優の踊り子が複数在籍していることで知られており、13時30分から23時まで1日4回上演している。

・階下には、かって東映映画封切館「天満東洋映画劇場」があり、斜め向かいに「宝塚映画」、その向かいに日活映画封切館「天満映画劇場」、さらに一筋西角に東宝映画封切館「第一劇場」と狭い一画に4つの映画館が立ち並んでいたいたが、今は多くがマンションに建て替わっている。

・かって、天満周辺には、JR天満駅の南側に「天満座」と菅栄町西交差点南側に「ナニワミュージック」といったストリップ劇場もあった。「天満座」は、大衆演劇からストリップ劇場に転身し、また大衆演劇の劇場に戻ったが昭和年代に姿を消し、跡地には平成9年築の

「キングマンション天神橋1」（24階建て・152戸）が建っている。
「ナニワミュージック」は、昭和43年6月の開館で、平成23年末まで営業していた。

昭和36年頃のJR「天満駅」周辺マップ